

第一編 自然環境

第一章 自然

山紫水明の本町はまことに美しい。私たちの祖先はこの清き山河に育まれて、幾千年の古い歴史を築いてきたのである。豊かな水と温暖な気候に恵まれた土地は、先史古代人が生活を営むのに好適の地であったと考えられる。本町は大分県境の連山から北方に、田川郡境と築上郡境に走る二つの支脈と、飯岳山（大坂山）から東に走る山系に囲まれた、東西七キロ、南北二・五キロの細長いクサビ型をした地域である。標高は南高北低で急峻な山岳に囲まれ、海拔一三〇—二〇〇メートルの間にある。水源を英彦山獅子の口に発する郡内二大河川である今川が、町の北部犀川盆地を、祓川は町の東部の急峻な山間地を縦貫して、いずれも豊津町と行橋市を経て周防灘に注いでいる。周囲四キロ、貯水量一五〇万トンを誇る本庄池と共に町内の肥沃な耕地を灌漑し、水稻をはじめとして豊かな農産物を産出している。本町の基幹産業は農林業が主体であり林野面積は総面積の七六割、七四九一ヘクタールを占めていて、三六集落中のほとんどが農林業を中心とした産業基盤をなしている。特に南部伊良原地区は杉、檜の林木育成に適しており、県下屈指の優良林業地帯を形成している。また北部丘陵地帯の一部を開拓して酪農経営が行われているが、平野部にあつては米作中心の農業が展開されている。気候は瀬戸内型気候であるが南部にいくにしたがい降水量が多くなる。地質は、町の南部が新生代第三紀溶岩（輝石安山岩）、中央部は朝倉型花崗岩類、平坦部は

沖積層となっており、一部飯岳山附近に変成岩が見られる。

総面積の一・二割が農耕地でその九二割を水田が占めている。今川、祓川及びその支流沿いに拓けており、平坦地、山麓地、山間地の三つの地域に分けられそれぞれ三六の集落が平坦地を除いては山麓、溪谷沿いに点在している。なかでも旧伊良原村は林野率九一・九割、耕地率三割の純山村であり現犀川町の四〇割近くの面積を有している。この地域の過疎現象は特に著しい。社会構造の変化に伴い、地域産業の崩壊、労働力の他産業への移行、都市近郊への移動は現在も続いている。特に山間部での人口流出は著しく若年層の流出と老後の帰郷現象等による高齢人口の増加に伴い内面的過疎は進行しているようである。

古代この地方は豊の国と呼ばれ古くからの名所旧跡も多く、城跡、廃寺跡等に特に修験道の栄華を極めた蔵持山、本庄池をはじめとして、奇岩奇石が聳えたつ蛇淵の滝、景観優れた野峠天狗ラインは、耶馬日田英彦山国定公園に包含されている。本町は明治維新により豊津県より小倉県に属し、次いで福岡県となり、明治二十二年四月村制施行に当たり、東犀川村、西犀川村、南犀川村、城井村、伊良原村が発足、さらに明治三十七年二月一日東犀川・西犀川・南犀川の三村が合併して犀川村となる。昭和十八年二月十一日町制施行で犀川村は犀川町となり、昭和三十一年九月三十日犀川町、城井村、伊良原村の一町二村が町村合併促進法により合併し、新制犀川町が誕生、現在に至っている。以来今日まで町制五十周年を迎えその基盤はますます強固となり、今後も安定した成長を願い健全な町勢の振興と発展を目指し、町の基本構想に謳われている二十一世紀にふさわしい町づくりのため、悠久の山河と祖先の生命につながる過去を顧みて、さらに輝かしく、逞しく、新たな犀川町の建設に努めていかなければならない。